



学園だより No.43

■発行人・発行所／学校法人 北海道カトリック学園 理事長 勝谷 太治
札幌市中央区北1条東6丁目10カトリック札幌司教館内

寄り添う

「私、天国に行けるかなあ」
「大丈夫、間違いなく、天国に行けますよ」

以前、病室で洗礼を受けた後のYさんとのやり取りです。Yさんは札幌のJR高架下でテント村を作っていた20名弱のホームレスのリーダー格の人でした。毎週炊き出しを行っていましたが、現場を仕切っていた彼のテントの中で毎回食事を共にしていました。

「高架下公園再開発の為、退去するように」市からの通達は突然でした。行き場を失う彼らのために市と交渉する役目を引き受け、慣れない交渉が始まりました。いったんホームレスになってしまったら、再び自立するのは至難の業です。市との交渉でゆるされた2週間の救護施設での滞在期間内に彼らの為に部屋を探さなければなりませんでした。しかし、ご存じのとおり、仕事も保証人もなしで、部屋を借りることは不可能で「住所」が持てません。そして当時救護施設は住所とならず、「住所」がなければ生活保護の申請もできませんでした。

そんな時、ある大手の不動産業者の会長が支援を申し出てくださり、事態は一転。全員部屋を見つけることができました。そして生

AIの時代に、質の高い幼児期からの教育を考える

札幌国際大学名誉教授 平野 良明

今や日本の小中高校生はタブレット端末が授業時必携のものとなりました。そしてこのような時代だからこそ、幼児期からICT環境に向き合うリテラシーの教育をと願う親が現れ始め、幼児教育の現場を困らせます。

「遊びは学び 学びは遊び やつてみたいが学びの芽」

このキャッチフレーズは次の幼稚園教育要領等の改訂に向けて文科省が示した「幼児教育の基本的考え方」の概要案において色刷りで使われていた箇所引用です。

生涯にわたる人格形成の基礎が培われる幼児期の教育の重要性は世界の先進主要国において共有される価値となっています。そして我が国においても幼児期の遊びの重要性を全ての幼児教育施設が共有している現状です。

乳幼児期からスマホやタブレットに触れる環境にある子

ども達に、安心・安全な環境で幼児期の発達に必要な、五感に響く直接的で具体的な体験機会を提供するのが幼児教育施設なのです。一人ひとりの子どもの「夢中・熱中・自己充実」と「興味・関心・意欲」を育む質の高い遊びとそのための環境構成が私たち保育者の役割です。

アップル創業者のステイブ・ジョブスは自宅で子ども達にiPadを使わせませんでした。マイクロソフト創業者のビル・ゲイツは自宅で厳格なテクノロジー使用のルールを決め、我が子が13歳になるまでスマホの使用を許しませんでした。そしてそれぞれは家庭において、読書や会話、議論を大切にしていたそうです。

東北大学の川島隆太先生はスマホ使用時間が長い子どもが学力が低い傾向にあることを調査研究によって示しました。私たち保育者は親御さんに

向けて「YouTubeではなく絵本を、読み聞かせを」「ゲームではなく外遊びや野外体験を」と継続的に発信しなければなりません。そして翻って、自園の教育の質を問わなければなりません。

楽しくなければ幼稚園（こども園）でない

今年度に入ってから、私は幼児教育関係者への全ての講演で語り続けています。「楽しい幼稚園（こども園）育てます」。

「子どもが楽しい幼稚園」「先生も楽しい幼稚園」そして「親が嬉しい幼稚園」、そのような幼稚園育てを提案して回っています。子どもも先生も共に楽しく、成長する子どもの姿を先生と親で共に喜び合う幼稚園育てです。

「遊びは学び 学びは遊び やつてみたいが学びの芽」

遊びが育てる人格の芽、学力の基本、私たち保育者は子ども達の五感に響く質の高い体験や遊びを求め実践し、子ども達の「幸福な未来」のために、親御さんと心と力を合わせていかなければなりません。

学校法人 北海道カトリック学園
理事長 勝谷 太治

活保護の申請を行い、ひとまず安心となりました。

しかし、本当の試練はその後でした。数名のボランティアの私たちにはできることに限りがあります。定期的に訪問することに勤めてはいましたが頻度は多くありませんでした。私たちは彼らに生活保護費が入ったら、まず、部屋代を払い、米を買うよう指導しました。お金が入るとすぐに使ってしまう人たちが多かったのです。しかし、自己管理の難しい人たちから脱落していきました。



1年後、一人が孤独死しました。詳しい状況を知りたくても、警察は「他人」には一切の情報をくれません。近くの住人から聞いた話では、食事もせずにバチンコと酒に明け暮れていたようで、亡くなった部屋にはコメの一粒もなかったそうです。さらに一人が、酒の飲みすぎで肝臓を壊し緊急入院し、

大切なもの

カトリック聖園てんしのおうち
保護者 小西 華恵

3歳の息子には10歳離れた姉がいて、私は歳の差で育児をしています。娘の乳児期に専業主婦だった私は、幼い息子を朝から夕方まで預けることに少しか抵抗がありました。楽しく通ってくれるかな?お友達と仲良くできるかな?長い時間で疲れないかな?など、多かれ少なかれ保護者の誰もが感じるこ

とかと思います。

言葉で伝えてくれる園での様子を聞いたりと、先生達はみんな家族のように温かく、ありのままの姿を受け止めて下さっていると感じます。私も安心してお任せできているので、元気すぎる息子も自分らしくのびのびと過ごすことができますが、これは当たり前ではないなと感謝の気持ちでいっぱいです。

お散歩の時に握った友達や先生の手の温もり。泣いた時や甘えたい時に

抱っこしてくれた安心感。優しく語りかけてくれた声。嬉しさや喜びを共感してくれた時の笑顔。どんなに時代が変化しても変わらない大切なもの。身体感覚としてずっと残っていくことでしょう。

素敵な先生達に可愛い子ども達。まさに“てんしのおうち”そのもの。ここでの生活は残りわずかですが、これからもずっと温かく見守って頂けると嬉しいです。



を望みました。これまで犯した多くの過ちを赦されるか心配しての、上述の発言だったのです。教会で遺体を引き取り、葬儀を行い、遺骨だけはなんとか遺族に引き取ってもらいました。

その後、札幌地区の教会として、炊き出しのボランティアグループを作り、以後、週1回の炊き出しを続けています。しかし、それはあくまで緊急避難的な食事の提供であり、自立支援の活動とはなっていません。本当の支援の難しさ、寄り添うことの大切さを痛感しながらも、私たちの現状の力では、これが今できる精一杯のところなのです。多くの矛盾、力不足を感じながらも、今できることを続けることに専念しています。

そして、今思います。あの時の私たちの善意は本当に相手に寄り添うものだったのか。かつてな善意の押し付けではなかったか。私たちが「正義」だと思って行った行為は本当に正しかったのかと。

認定こども園
虹の森カトリック幼稚園

にじのもりフェスタ

保育教諭 丸谷 ほのか

虹の森では、昨年度から新たな園行事の1つとして「にじのもりフェスタ」という親子行事を行っています。コロナも落ち着き、「親子が一緒に楽しめる行事を、また復活させたい!」という思いで生まれたのが、「にじのもりフェスタ」です。職員が「楽しませてあげる」のではなく、「皆と一緒に全力で楽しむ」という虹の森らしさを大切に取り組んでいます。

当日は、幼稚園がお祭り会場に! 普段は「先生」の職員も、「いらっしゃ〜い!」と、「お祭り屋さん」に大変身です。子ども達も浴衣や甚平、半被を着て、園全体がお祭りカラーに染まります。今年は、「ポップコーン」「わたあめ」「ヨーヨー釣り」など、全部で8つの出店を準備し、「盆踊り」や職員による出し物も行いました。

ニコニコ笑顔で大喜びの子ども達を優しい眼差しで見つめながら、保護者同士の会話にも自然と花が咲き、アットホームな温かい雰囲気の中で、今年度も賑やかで楽しい時間を過ごしました。

「にじのもりフェスタ」が、虹の森の定番行事の1つとして、子ども達や保護者の方々から親しまれる行事になっていくよう、これからも職員一同でアップデートしながら、作り上げていきたいと思います。

認定こども園
登別カトリック聖心幼稚園

安心して楽しめる園生活を

保育教諭 工藤 彩華

私は2歳児の担任をさせて頂いています。4月は泣き顔ばかりだった子ども達の表情も、徐々に笑顔が増え毎日元気に登園をしてくれるようになりました。私自身も「まずは幼稚園という場所に安心感を持ち、毎日楽しく登園をして欲しい」という思いで4月から保育をしてきました。その為に園生活での基本となる生活面での援助であったり、クラス活動や自由遊びの時間を通して、子ども達1人1人の気持ちに寄り添いながら信頼関係を築けるよう心掛けてきました。

最近では「先生遊ぼう!」「こっちに来て!」「先生大好き!」と子ども達から歩み寄ってくれることも多くなり、先日保護者の方から「休日も幼稚園に行きたいと言っています! 毎日楽しいとお話をしてくれるので安心してしています!」と嬉しいお言葉も頂きました。このような日常の出来事を通して、子ども達への愛情もより一層深まり、私自身も「子ども達の為にもっと頑張りたい!」という気持ちの糧にもなりました。

これからも子ども達や保護者の皆さんとの信頼関係を大切にしながら、安心して楽しく過ごして頂けるような保育を日々心掛けていきたいです。

カトリック聖園こどもの家

思いやる心

保育教諭 二瓶 結伊

イエス様が生まれたクリスマスの日を迎えるための待降節があります。本園では待降節期間、天使様が一週ごとに約束を持って来てくれ、一つ一つの約束を守ることを通して、相手を思いやる気持ちや諦めない心等を育めるようにしています。

私が年長担任をしていた頃、聖劇の練習中、突然泣き出してしまった子がいました。毎日コツコツ練習を頑張っていましたがお遊戯会が近づくに連れて、緊張が増したようでした。そんな時、同じクラスの子どもたちが「大丈夫だよ、ドキドキするよね」「一人じゃないよ、皆で助け合おう」「皆のこと神様が見守ってくれているから一緒に頑張ろう」とそれぞれの言葉で励ましている姿を見て、私は嬉しくなりました。少し前まで、何事にも難しいと諦めがちな子どもたちでしたが、相手の気持ちを考え、思いやる言葉掛けをしていました。待降節の約束を通して、子どもたちの中にしっかり相手を思いやる気持ちが大きく育っていて、改めて待降節の取り組みの素晴らしさを感じた瞬間でした。

私はこの日のことを鮮明に覚えています。そして今の自分のクラスの子どもたちにも思いやる気持ちを大切にしてもらいたいと思い、今日も過ごしています。

旭川藤幼稚園

保護者からの学び

主幹教諭 岩間 有希

「おはようございます。いってらっしゃい。」玄関先で保護者の方へ挨拶をしてお子様をお預かりします。私が新人の頃、あるお母さんから「少しお話いいですか?」と声を掛けられ、私の未熟な保育についての意見や指摘を受けました。恥ずかしながらその場で号泣してしまい、その日はお詫びをするので精一杯でした。

その頃の私は幼稚園教諭という仕事に慣れ始め、ルーティーンをこなすように過ごしていたのだと思います。この日をきっかけに自分の保育への姿勢に危機感を持ち、大切なお子様一人ひとりをお預かりしているという意識を強く持つようになりました。毎日一人ひとりと目を合わせ会話をすること、小さな泣きも聞き逃さず子どもの言葉によく耳を傾けること、その子が何を考えているのか表情や行動からも思いを汲み取ること、今思えば当たり前のことなのですが、当時の私には足りなかった関わりでした。先生一人で何十人と相手に過ごしていますから、丁寧な対応が出来ない時もあります。ですが、忙しさを理由にそれぞれの思いに寄り添えないようではいけないと気を引き締めて毎朝出勤し、ただの「私」から「岩間先生」になります。大切なことに気付かせてくださったお母様に感謝しています。